

11. 珠洲焼の製造

野 本 裕 雅

1. はじめに
2. 珠洲焼
3. 現状
4. 製造工程
5. 職人の珠洲焼との関わり方・活動
6. 珠洲焼のこれから
7. おわりに

1. はじめに

私が珠洲焼との出会いは実習が始まってからになる。当初私は誰でも必ず経験し、情報を集めやすいという理由で主に葬式儀礼について話を聞いていた。そこでかつて遺骨を納める骨壺に「珠洲焼」を使っていたという事を聞いた。ここで聞いた、かつて長年土に埋められていた骨壺を狙った盗難事件が発生したというエピソードは私の好奇心に火をつけた。

産業や観光の話の中でも度々登場する珠洲焼という焼き物。金沢でもあまり耳にすることが無いこの焼き物は名前に地名が使われていることから、この珠洲特有の陶芸品であろうということは簡単に想像できる。本調査前に作成した資料にも名産欄に珠洲焼の名前はあったが、一体どのような特徴をもったものであるのか、いかにして作られ、いつから存在するのか、謎は多かった。元々私は工芸品、またそれを作る職人というものに対する憧れをもっていたので興味は珠洲焼に移っていった。その後実際に珠洲焼を製造している陶芸家の方にお会いする機会があり、珠洲焼についてのお話を伺うことが出来た。初めてみた珠洲焼は、黒く、シンプルで日本史の教科書に出てきた太古の陶器のようであった。

今回の実習調査は出田、広栗、鈴内の三郷地区を対象としたものだったが、珠洲焼の製造に携わる人々は珠洲の各地域に広く住んでいらっしゃるだったので、時には三郷から出て話を伺った。陶芸家の方々は本当に個性的で、他の地方から移ってきた方、仕事を辞めて陶芸家になった方など、

生き方の参考にもなった。ただ、やはり全ての陶芸家の方に話を伺うことは日程、移動の事から不可能であり、三郷の近くに住んでいた方々の焼く珠洲焼は一体どのような特徴をもったものなのか、どう作っているのかなどのお話を伺った。その中でも特に面白いと思った製造工程を中心にまとめていきたいと思う。

2. 珠洲焼

珠洲焼館のホームページ (<http://suzuyaki.com/history.html>) では、珠洲焼は次のように紹介されている。

珠洲古窯は須恵器の系統を継ぎ、平安末期から鎌倉・室町時代にかけて約400年間、能登半島の先端に位置する「珠洲」の地で焼かれ、関西以北の広い地域で、庶民の日常器として使われていました。

桃山時代まで盛んに作られ、北前船で遠く北海道まで運ばれていましたが、戦国期に忽然と姿を消したことで「幻の古陶」と呼ばれていました。昭和30年以後、多くの窯跡が発見され、考古学の研究者により「珠洲焼」と命名され、注目されるようになりました。昭和53年に、約400年の眠りを経て、珠洲市陶芸センター（技術指導所）の珠洲焼復興窯に火が入れられ、その後は窯元や陶芸家も増え、その独特の技術は着実に受け継がれています。

珠洲焼は、古墳時代中期に大陸の陶工が伝えた須恵器の系統を受け継ぐ素朴な焼き物です。鉄分を多く含むすずの土を用い、釉薬（うわぐすり）を掛けず窖窯（あながま）で赤松を燃料に1200度C以上の高温で燻べ焼き（くすべやき）という強還元焰焼成で焼き上げます。土に含まれる鉄分が炭素と結合し、黒灰色の落ち着いた美しさを醸し出し、薪の灰が溶けて自然釉や灰被（はいかつぎ）となり、微妙な景色をもたらします。焼閉めの炆器（せっき）は、使い込むほどに味わいを出す焼き物なので、何卒ご愛用下さい。

かつて使われていた窯から採掘された珠洲焼の中には底に木の葉が張り付いた焼き物があり、成形時に木の葉で抑えるといった技法があった播磨（兵庫県）の渥美焼とも関係があるとされている。また甕のプロポーシオン、綾杉紋という特徴的な紋は東海地方の常滑焼に見られるもので、他の地方の技術が合体して生まれたものである。北海道でも発見例があるとあったが、これは当時の珠洲が日本海側の航海の中継地点であったため、珠洲についた商船によって運ばれたためである。最盛期には日本の四分の一が商圏であった。珠洲の近くの海底からも珠洲焼が多数見つかる。

っており、貴重な資料となっている。当時は甕や壺などの日用品の他に宗教儀礼に使う経筒や神像等も焼かれていたという。

珠洲焼は、焼く際に出来る灰のかかり方、炎の当たり方によってできる色合いの変化がある。

3. 現状

現在珠洲には珠洲焼に関係ある施設として陶芸家育成のための「市立陶芸センター」、作家の作品を委託販売する「珠洲焼館」、中世の珠洲焼の展示のための「珠洲焼資料館」の三つがある。これらはまとめて「珠洲焼の里」とよばれ、若手の教育、販売、伝統の保存、展示などの役割を担っている。平成23（2011）年10月22、23日には珠洲焼祭という展示販売や電動ろくろ体験、飲食、特産品販売という内容の催しが開催された。他にも“珠洲焼振興プロジェクト事業”として市が華道展や茶道展、また東京ギフトショーのために予算をとるなど観光資源として珠洲焼振興に力を入れている。シンポジウムやフォーラムも開き、珠洲焼の発展、また参加した地元の人々と珠洲焼のブランド化について話し合うことを目的としている。

珠洲焼の形をしたバームクーヘンなども作られ、お土産として人気である。インターネット上では、珠洲焼を題材にしたショートドラマも見ることが出来る。本物の陶芸家の仕事場を舞台にしているのでリアリティがある。珠洲の景色や食材などもさりげなく出てきて実際に珠洲に足を運びたくなるようになっていく。地元の人々には、実際に使う食器としてだけではなく退職祝いなどの記念品として贈られることもある。

4. 製造工程

珠洲焼がどういった工程を経て生み出されているのかということを陶芸家の方のお話を参考にまとめた。焼き物に欠かせない要素である土、薪、窯についての説明、そしてそれらを如何にして珠洲焼という形にする成形、装飾、焼成という3つの工程をまとめていきたい。

4.1 土

鵜飼川周辺や三崎など珠洲市内から持ってくる。昔の窯が発見された場所の近くから土をとれば、出土した珠洲焼に使われていた土と同じような成分の物がとれる。陶芸センターから土を持



写真1 珠洲焼の壺

ってくる方もいた。土は作品を作る度に持ってくるのではなく、あらかじめ大量に運び、それを何年にも渡って使う方が多い。Sさん（鈴内、男性、38歳）は一回に1トン分焼き、一年に2回焼くので、10トンを5～6年で使い切るという。土はビニールシートを被せて積まれていた。

では一体どのような土が珠洲焼を焼くのに適した土なのか。重要なのは土の中の鉄分である。珠洲焼の黒さを出すなら、鉄分の多く入った土が望ましい。鉄分は特有の黒さを引き出す作業工程、還元焼成に影響する。かかる時間や耐久性にも関係する。ちなみに鉄分が多ければ還元時間は短くなり黒色になる。逆に少ないと時間は長くなり、焼きものは白くなる。

多くの方が珠洲の中で土を見つけるが場所によって土の成分は異なる。火に弱い土質だとそのままと割れやすいので耐火性が強いと言われる信楽の土等を、粘土を作る段階で混ぜる。Nさん（飯塚、男性、50代）は珠洲焼に使う窯は場所によって温度が変わるので、窯のどこに置くかで粘土の混ぜ率を変えて作品を作るという。

土はそのまま粘土として使えるわけではないので粘土にするためにいくつかの工程を経なければいけない。まず、とってきた土を水に溶かし液状にする。今度はそれをふるいにかける。これは土の中に混ざっている小石や植物等の不純物をとるためである。その後乾かし、練ったあと寝かせて粘土の完成である。他の陶芸家人口の多い焼物は粘土屋に頼んでやってもらうということもあるらしいが、現在の珠洲焼職人の数では難しいということでこれは個人で行わなければならない。

しかし、個人がそれぞれ作った粘土はまた成分もそれぞれである。そのようにすることで陶芸家によって違った色合いや雰囲気が出るのではないか。

4.2 薪

穴窯、倒焰式窯で火をおこし、火力を維持させるために無くてはならない、その他薪の種類によって珠洲焼の特徴ともいえる自然釉（表面の灰が溶けたことによって生じた微妙な色合い）の雰囲気が変わる。珠洲焼では穴窯で一回に500束～700束もの薪を使う。倒焰式窯はサイズが穴窯よりも小さいのに加え灯油を入れるためこれより少ないが一度に150束もの薪を使う。薪の種類は主にアカマツ、ナラ、スギ、雑木であり、窯の温度が低いうちは火がつきやすいという理由で木端を使用する事が多い。薪によって自然釉の雰囲気や灰が溶けはじめる温度が違うので、どのようなものを焼きたいかでも使うものを変える。

前述したように窯焚きには数百束にも及ぶ大量の薪を燃やし続けなくてはならない。そこにかかるコストが小さくないのは想像に難くない。販売所の方によると珠洲焼の作品の価格が高くなってしまったのにはこうした理由があるのではないかということであった。珠洲焼にとって薪は火をおこすためだけのものではなく、仕上がりを決める重要なものである。ゆえに如何に自分の求

める薪を用意するかということが作品の出来に関わってくる。しかし一度に使う薪の量は膨大であり、普通に買っているのは大きなコストがかかってしまう。

陶芸家の方々は薪にかかるコストを抑えるためにどのような工夫をしているのであろうか。

Sさん

アカマツは温度が上がりやすく燃料として良いとされているが、コストがかかるので間伐材やスギを中心に使っている。アカマツは一束400円で一回に500束使うと20万円にもなってしまうのに対し、杉や廃材を使う10分の1にまで抑えられる。薪は自分で専用の薪割り機を使って作り、その後半年間薪を乾かすために窯の近くに重ねて置いておく。薪は細かい方がエネルギーになるのが早いので、温度を上げるときは細かい薪を使う。

Nさん

一回に700束の薪を使う。そのために2〜3カ月かけて薪を割る。10トンの木材がだいたい400束になるのでそれを倍以上作る。木材は珠洲からきているもので、森林組合が穴水の木材市場に出している。中山さんはパルプ用の値段で買っている。マツが1トン6000円ナラが1トン7000円で購入。これを薪の状態で買うと1束600円程になってしまい、コストは跳ね上がってしまう。ナラが高いのは、しいたけを栽培するのに使う事が出来るためだという。割った薪はすぐには使えず、マツは1年、ナラは2年乾かさなければ使えない。

その他にも陶芸家が、山の所有者から山を管理することを条件に木を切る許可をもらっているという話も聞くことができた。珠洲焼陶芸家にとって薪を如何に低コストに抑えるかはポイントであるという。

これは全ての商品がそうであるが、珠洲焼の価格というものは制作費の上に利益が出るように設定されている。制作費というのはそこにかかった材料費のことであり、これが主に薪である。薪の値段を抑える事が出来れば、制作費が抑えられより安価に珠洲焼を世に出す事が出来る。ある陶芸家の方が「薪にかかるコストを小さくすることが出来れば、珠洲焼の価格も抑える事が出来、より多くの人に手に取ってもらえるのではないか」と言っていたのがとても印象的であった。

4.3 窯

珠洲焼使われる窯は穴窯と倒焰式窯、ガス・電気窯である。

穴窯は古来の珠洲焼を再興する際、その独自の質感を出すのにあつた窯として用いられている。須恵器とともに伝来し、同じく須恵器の流れを汲む信楽焼、備前焼を焼く際にも使われている。

穴窯は本来斜面に半分埋まっていたものであった。これによって湿気の影響を受けることが出来、より多様な雰囲気を持った作品を作ることができる。写真の窯は平地に作られているが、周りを土で埋めることによって斜面に作ったときと同じ条件を得ることができるという。平成12(2000)年に珠洲古窯研究会が昔の窯を復元し、その窯を使って焼成実験が行われた。その時の窯はかつてあったとされるように粘土で壁を作ったが、焼成時に水蒸気により窯が



写真2 穴窯

膨らんで粘土が割れて内壁が崩れるなどしたという。今回見せていただいた窯の構造は、レンガをアーチ状に組み上げて作られていた。耐久性ではやはりレンガの方が強いが、焼成時にはやはり膨らんでしまう。窯の上に瓦が乗っているのだが、それは窯を抑える重りの役割である。また、レンガ窯の方が粘土窯より温度が下がりにくいという実験結果もでているため、高温で焼き続けなければいけない珠洲焼には適している。窯口の下方に薪をくべて窯の温度を上げる。内部には板と柱で段をつくり作品を並べる。中は作品でひしめき合っていて、この段が何かの拍子に崩れてしまうと多くの作品が傷んでしまう。そのような事態を防ぐために板と柱はドーナツ状にした粘土によって固定されている。これで柱と板はくつつき安定し、さらにドーナツ状の形ははがしやすいので作品を取り出すのも簡単だという。奥に空気を通る隙間があり、そこで空気の圧力を調節できる。その面積によって焼き色も変わる。煙は同じくレンガでつくってある煙突から出す。煙突があるにもかかわらず焼成時は窯の周りも相当煙たくなるのでそれが仕事場を民家から離して作る理由でもある。

倒焰式窯(とうえんしきかま)は、もともと少量の作品を試験的に焼くためのものだった。レンガ造りで大きさは穴窯と比べて小さい。湿気が無いため温度がすぐ上がり、灯油を使って燃やす

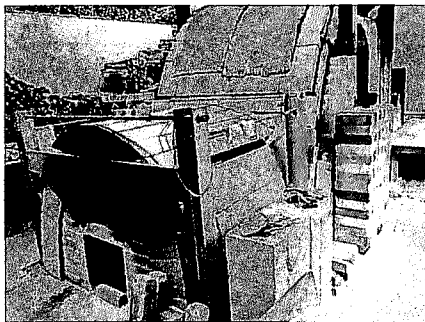


写真3 倒焰式窯

事も出来るので効率が良い。焼成時間も一日半～二日間と短い。写真3のMさん(鈴内、男性、66歳)の窯は屋内にあり、一年中焼けるということで年に6回焼いているという。煙突は屋外へと続いている。窯から煙突の間の管に砂を入れることで密閉することが出来る。穴窯が壺や甕などの大きな陶器を焼くのに適しているのに対して、ジョッキや湯飲み、皿など割りと小さいものを焼くのに適している。

ガス窯はガス、電気窯は電気を使って陶器を焼く窯のことで、その長所としては温度調節が楽に出来る事と薪を使う必要がない事が挙げられる。機械の管理で温度調節をするため火の加減を観る人も必要ない。手間がかからないので一人でも楽に焼くことができる。時間も20～30時間と他の窯と比べても圧倒的に早く焼ける。また、温度調節が思いのままであるので失敗が少ない。どれだけ失敗せずに焼きあげたかという“取率”で仕事の出来を判断する陶芸家の世界では重要である。薪代もかからないので低コストで生産可能。色合いが同じ様なものが作りやすいため量産が出来、焼きもの屋に置きやすいという。しかし、薪を使っていないということは灰が出ない。つまり。表面に珠洲焼の特徴とも言うべき自然釉が付かないということである。そのため灰をスプレーで吹きかけるとする方法をとる。珠洲焼で行われているかはわからないが、木や粘土、金属を燃やし、その灰を水に溶いてそこに素焼き浸して焼くという方法もあるらしい。このような方法をとることで自然釉のついた珠洲焼が完成する。ガス・電気窯はここ最近現れたものであり、主に新しく始めた人が使用している。既に出来上がったものが売っているため設置しやすい。今回話を聞いた方の中にガス・電気窯を使っていた方はいなかったので残念ながら実際に使った感想を聞く事が出来なかった。

拝見させてもらったどの窯にも櫛と神酒を置く台が付いており、焼き入れを行う際に上手くいくよう、無事に終わる事を祈るという。今回多くの窯を見たが、窯によってもその条件の違いで焼け方が異なり、「その窯が一体どのような窯なのかを把握するのに10回ほど焼いてみなければ」と、Sさん（鈴内、30代、男性）は言っていた。

多くの方が珠洲焼を焼くなら薪でなければと言ひ、実際に火を使って焼く事を、珠洲焼を焼くにあたって重要な要素ととらえている。Nさんは「基本的に皆、珠洲焼は窯を使って焼くものだという考えを持っていて穴窯で焼いてみたいという願望を持っている」と言っていた。ただ、現状自分の窯を作るのには大きなコストがかかってしまい個人がいきなり持つのは難しいという。

4.4 成形・装飾

成形にはろくろを用いたものと手びねりがある。前者は練った粘土をろくろの上に乗せて形を作っていく。同じような形のもの、例えばピアジョッキ等をいくつも作るならろくろでの成形、手びねりは自由な形を作れるが量産には向かない。壺などの大きなものを作る時も手びねりで作る。複雑な形の物は手ひねりによるものである。ろくろで形を作った後に手ひねりで手を加える一次成形、二次成形という作り方もある。

珠洲焼は基本的に装飾や釉薬（器の表面に塗り、装飾したり丈夫にするもの）はしないが、全くというわけではなく、中には装飾が施された物もあった。珠洲焼職人の方々の多くは、煌びや

かな装飾など一切していない、素朴で力強い黒色の珠洲焼に魅かれたという理由で珠洲焼を始めたと言っている方が多く、装飾に関しては珠洲焼の良さを損なわない程度にということであった。

象嵌 (ぞうがん)

化粧土という色が付いている土を、一度焼いて半生の状態の器に塗りこむ。他の陶芸で用いられていた技法。金属製品にも使われる技法

かきおとし

象嵌と同じく化粧土を器に塗り、そこを釘で引っ搔いて絵を描く。

紋様

アクセントとして櫛をつかって波紋様やラインを入れる。ろくろ作りの小さい器装飾では装飾として施される。櫛のようなものでつける。

たたき紋

壺などの全面に施されているがこれは装飾ではなく、器を締めるためである。壺から水分を抜くために板で器を両側からたたく。この板は平らではなく凸凹や線がある。これが器に引っかかって、土を逃がさない。結果表面に紋様ができる。これが不十分であると焼成の時に陶器の中の水分が沸騰して割れてしまう。

火襷 (ひだすき)

皿を焼くときに、器の色合いに変化をつけるために藁をひいて、さらに湯飲みなどをのせる。これによって焼きあがった後で皿には藁の跡が付き、さらに、上に器が乗っていたため、その部分だけ周りとは色が違うといった物が出来る。元々は備前焼で用いられる技法である。

その他

作品にハンコを入れる。

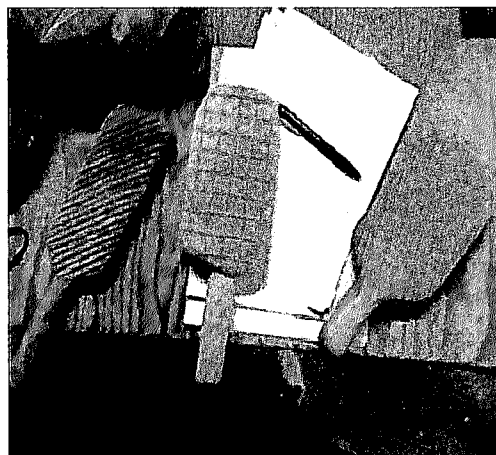


写真4 焼き物をたたく板



写真5 作業場

これらの技法の中には他の焼き物から持ってきたものが多く、珠洲焼特有の物は少ない。それは、珠洲焼の歴史が途中で一度切れてしまっていたためであると考えられる方もいた。もしも珠洲焼が途切れることなく、現代まで受け継がれていたなら、その間、多くの技法が生み出された可能性がある。

4.5 焼き入れ

穴窯の場合6日前後かかる。はじめの三日間は200度くらいで“あぶり”といい、窯と器の湿気を抜く。水分が熱を吸って温度が上がりにくいという状況を防ぐためである。「休みたき」ともいい、窯の床を温めるという意味もある。この後は窯の温度を徐々に上げていき最高800度くらいにしておく。すすが始めると大体600～700度になっている。その後二日間半は温度を上げて焼く。この工程を“せめだき”という。この時の温度は1200度にまで上げるが窯の中でも温度差があり、全体が1200度で均一になるわけではない。これは小さければ小さいほど焼きやすく、小さい時は前後で40～50度だが大きいときは100度にまでなってしまう。窯の中の温度を測るのには“ゼーゲル”というものを窯の中に入れて使う。このゼーゲルは1200度になると曲がるという性質を持っているので、わかりやすく温度を把握することができる。1200度は、珠洲焼の器に雰囲気を出す自然釉、その素になる灰が器の表面で熔ける温度である。

窯の中の温度は湿気が多いと上がりづらく、季節によって変化する空気中の酸素の密度も影響してくる。湿った夏より乾燥した冬のほうが燃えやすく、夏は燃えにくい分、酸素を送りすぎてしまうため、焼きあがりも良くない。また、高温であるため、夏は見ていての方にとってもつらいという。せめだきの終わり際に最期の工程の“いぶし”に入る。この、いぶしを経ていない状態だと珠洲焼は同じく須恵器を母体とする備前焼に似ているという。窯を密閉し、薪を増やして窯の中の酸素を無くす。そうすることで器の中の鉄分から酸素が無くなり、珠洲焼特有の黒さをだすのである。また、この時熔けた灰は冷えて網目状に固まる。これを戻し“還元焼成”という。この時間は6～10時間というが粘土の説明したとおり土の中の鉄分が多ければ短く、少なければ長くなる。

この一連の工程は6日間にも及び、その間火の番を絶やすことはできない。一人で乗り切ることとはとうてい不可能である。Sさんの窯焚きの際は、知り合いの職人さんを二人よんで八時間交代で火の番を手伝ってもらった。そして、今度はその人が焼き入れするときに手伝いに行くという。Mさんは家族の方にも手伝ってもらっている。焼成が済んだあとは、そのまま自然に窯の中が冷めるのを待ち、焼きあがった陶器を取り出す。冷めるまでには大体三日間～四日間かかる。

5. 職人の珠洲焼との関わり方・活動

Mさん（鈴内、男性、66歳）

元々は大工をしていたが身体を壊してしまい大工職から身を引かなくてはならなくなってしまった。その後研修センターで陶芸を習い始め、数年後に窯を開いた。作品は委託販売で土産屋などに置いている。ピアジョッキや結婚式の引き出物など、個人からの注文も受け付けている。

Wさん（二子、女性）

旦那さんが大阪の個展で珠洲焼に魅せられ、珠洲焼を習うために珠洲市に住み始めた。旦那さんが亡くなった後は窯を使うことは無かったが、三回忌に自分で珠洲焼を焼いた。以降独学で作り方を学び、二年に一回のペースで焼いている。作品は珠洲焼資料館の販売所で委託販売している。

Nさん（飯塚、男性、50代）

金沢で九谷焼を学んでいたときに古陶展で出土した珠洲焼に出会った。他の焼き物にはない黒さに惹かれたという。その後新聞で珠洲焼復興の記事を見つけ、珠洲へと向かった。当時は復興に向けて研修センターが建設中であつたが、長い間作り手がいなかったためノウハウがなく、同期入所の方と思考錯誤を繰り返し復興させた。作品が出来ると個展を開いたり販売所に置く。

Sさん（鈴内、男性、38歳）

学生時代から陶芸教室に入っており、卒業後九谷焼の製陶所で九谷焼の生地をつくっていた。珠洲の旅行中に珠洲焼に出会い、その素朴さ、力強さに惹かれて、作ろうと決心した。資金をためるために森林組合に入って林業に携わっている。

Nさん（鈴内、男性、82歳）

昭和57（1982）年に蛸島センターで教室があり、そこへ教わりに行っていた。最初は3、4人しかいなかった。コンクールなどに出品し、入選。伝統工芸士の組閣を持つ。

Tさん（鈴内、男性、73歳）

珠洲市古窯の調査をし、珠洲焼資料館開館で副館長も務めた。調査・研究をしている傍ら、自身でも珠洲焼を焼く。出来上がった作品は茶会に出品されたり、ギャラリーやデパートで展示直売される。個展を開いて展示もする。

委託販売とは土産屋や店のスペースに作品を置かせてもらい売するという販売方法のことであり、出品者は店に手数料を払う。値段は出品者が決めることができるが、ジョッキなどは大体相場が決まっている。店による買い取りはほとんどなく委託販売が主流である。「珠洲焼館」には多くの作家の作品が扱われており、ジョッキや湯飲みからアクセサリやユニークな形の置物まで置いてある。

現在珠洲焼を作っている方の中には元々何かほかの事をしていた、陶芸センターの焼き物教室で趣味として学んでから本格的に始められたという方が多いという。中には、県や国外のコンクールで賞を取った方もいて、様々なところで展示会を開いている。多くの方は珠洲で活動しているが、中には他の地方で創作活動をしている方もいるという。今回お会いした方は男性が多かったが、珠洲焼館では、女性の作品もあった。

6. 珠洲焼のこれから

話を聞いている時、珠洲焼の今後を訪ねると多くの方が後継者についてが一番の課題だとおっしゃった。現在、珠洲焼陶芸家は年配の方が多く、若者が少ないという。焼き物自体は古くからあったが、一度途絶えてから復興まで時間が空き、現代によみがえってから30年しかたっていない、まだまだ他の地域から珠洲焼をやろうという人は少ない。

歴史が途絶えているがゆえに、珠洲焼はまだまだ発展する可能性を秘めている。そのためこれから長い時間かけて伝統を引き継ぎ珠洲焼と関わっていくことが出来る後継者が必要なのである。そのためにはまず珠洲焼というものを知ってもらうこと。石川県の珠洲という所にこんな焼き物があるという事を全国に知ってもらい、興味を持ってもらう。珠洲焼を観光資源として充実させることが行く行くは繋がっていくのではないかな。

現在は珠洲焼の里を中心に珠洲の中でも観光資源として存在感を放っている。陶芸家の県外での活躍もあって、県外から足を運んでくる人も増えている。また、ある方は、現在はまだ珠洲焼を専門として教える事が出来る人は少ないと考える。珠洲焼専門の先生を派遣して各地で教える事が出来れば、より多くの人に珠洲焼に興味を持ってもらい、技術を引き継ぐ事が出来るのではないかな。

これから必要だと考えられるものに組合の存在を挙げる方もいる。他の地域には焼き物の組合があり、仕事をとったりしているが、珠洲焼ではまだそこまではしていない。現在は個人の仕事のために個人が増えていくだけであり、全ての陶芸家の仕事の量が安定しているとは言えないという。組合を作るには誰かが先頭でみんなをまとめていかなければいけないが、陶芸家という存在は個人主義なためまとめるのが難しいという。組合で珠洲焼の商標をとってしまおうという

事もあったが、いまだ実現していない。組合があれば、大きな注文も受ける事が出来、若手にも仕事を渡す事が出来、珠洲焼という道を選びやすくなるのではと。また、それを通し多くの人に認知されるのではないか。現在陶芸センターでは十数人が学んでいるらしいが、全員がそのまま珠洲焼の道に進むわけではない。元々趣味として始めたという人の方が多いだろう。だが、学んでいくにつれて趣味としてではなく、更に進んで行きたいと思う人もいだろう。そのように思った人が珠洲焼への道に進みやすいような環境を作っていくことができれば徐々に珠洲焼の人口も増えてくるのではないだろうか。

7. おわりに

はじめていく珠洲という土地でのフィールドワーク。なかなか難しいところもあったがその全ての経験が私にとって得難いものであり今こうして考えるととても充実した一週間であったと思う。職人の世界を覗いてみたいと思い、珠洲焼をテーマに選び、沢山の人にお話を伺った。無知な私の初歩的な質問にも一つ一つ丁寧に答えていただき、仕事場にも入らせていただきとても貴重な経験であった。中には作品を持たせていただいた方や、宿にスイカと珠洲焼の催しについての情報をわざわざ届に来てくださった方もいて本当に感謝するしかない。

また、珠洲焼の事だけではなく、土地の祭り、産業、習慣、一人ひとりの昔話など様々な事を学ばせていただいた。どの方も本当に快く受け入れてくれ、まるで祖父母の家に帰省したような錯覚すら覚えた。現地の人の生の声を聞くという事がいかに重要で、多くの事を教えてくれるのかという事が身にしみた。この経験は今後の私の財産になるだろう。

調査にご協力していただいた方々、毎日素晴らしい料理を食べさせていただいた山中荘の方々、先生、共に時間を過ごした研究室の面々、ありがとうございました。

もしこの報告書で珠洲焼に興味をもたれた方がいたら、これほどうれしい事はありません。私も現在いただいたものを使っておりませんが、泡が消えにくく美味しいビールが飲めると噂されているビールジョッキ、このジョッキを冷凍庫で冷やしてビールを注いで飲むと最高です。